■バニーエルザはショタの催眠肉便器　７日目

……依頼七日目。今日が少年の世話をする依頼の最終日となる。

昨日、解除条件……危険日中出しを達成したにも関わらず少年の呪縛が解けていないことを確認したエルザ。
彼女の元に、少年が最後のゲームを持ちかける。

「……やはりあの解除条件は嘘だったか」
【まあね。でも依頼は今日が最終日……】
「依頼期間が過ぎるまでは、どうあっても抜け出せん……最初から仕組まれたものだったということか……！」
【そうでもないよ？　昨日のはウソだったけど、『イカなければ解放』とかはホントだったしね】
「……」

真に受けられないが……少年の言い分では、エルザと快楽勝負においては、少年は偽っていないらしい。
そして最終日の余興も、快楽・絶頂の応酬で解放を賭けたゲームにするようだ。

―― パンッ！

少年が手を叩き、ラストゲームのルールを説明する。

【残念だけど、依頼期間が過ぎたら本当に解放だよ。でも、エルザさんは今すぐこんなとこから出たいよね？
てことで、設定した条件を達成できたら解放してあげるよ。
条件は……
『この屋敷から出る』もしくは『イカない』。
でも安心してよ、すぐイッちゃうだろうから、その時は『喘ぎ声を出さなければ』解放したげるから。
あ、それでもすぐ声出るしなぁ、その時は……】
「もういい！　この屋敷から出れば……本当に解放されるのだな？！」
【そうだよー♪　ていうか本気で出られるって思ってるんだ？　いいね、やっぱりエルザさん最高！
ちなみにボクは開始の合図をしてから一分は動かないから。あと一回射精した後もね】
「……いいだろう……！　このふざけた術式とも、永遠に決別してやろう……！
そしてその時こそ、お前が裁かれる時だ！」

少年はあらゆる手を使い、エルザを期間ギリギリまで陵辱し続けるつもりだろう。
いかに強大な魔力を持っていようと、流石に七日以上も完全に無力化させることは不可能なはずだが……
七日かけて快楽調教することで、エルザを心から堕とせるという算段なのか。

なんにせよ、これで最後だ。

「いつでも構わん……ゲームを始めろ！」
【おっけー♪　じゃ……スタート！】

合図とともに、エルザは全速力で近くの窓へと向かう。
出られればそれで条件を満たせるのなら、わざわざ玄関から出る必要はないはずだからだ。
よって最も近い、出られるサイズの窓に向けて駆ける。
バニー姿を強制されており、更に術式のせいで身体能力は少年以下にまで下がっている。
必要最小限の動きで窓への最短距離を駆け……

【二九……二十……二十一……】
（まだ四十秒近くある……これなら出られる！）

窓に手を伸ばした、その瞬間。
窓に張られた紙……それに描かれた紋様。昨日も見た紋様と、短い文章が視界に入る。

『初日の催眠セクハラを思い出す』
（何だ……これは……っっ♥♥）
もみもみもみもみぃっ♥♥
「さっ♥　催眠などっ♥　通じないぃぃぃぃぃぃっ♥♥」
（なっ♥♥　触れられてもいないのに♥♥　快感が♥♥　口が……勝手に……っ♥♥）

紋様と文章を見た途端、初日に尻を揉まれて半ば絶頂しかけたこと、その際の快楽を思い出してしまう。
おかげでその時の急激に絶頂に近い性感が発生し、言葉までその時のものを勝手に発言していた。

（何か……罠を仕掛けているとは思っていたが……♥♥　こういう趣とは……っ♥♥）

エルザが抜け出せるような位置に、あらかじめ新たな術式で罠を置く。
……というところまでは予測していたが、過去のセクハラ・陵辱を強制的に思い出させるものとは。

（くっ……ここにいると♥♥　快感が襲い続けてくる♥♥　べ、別の出口を見つけなければ……♥♥っ）

しかも罠の効果は継続して発生し、絶え間なくエルザを蝕み続ける。これではこの窓からの脱出は不可能だ。
少年の性根の悪さを改めて感じながら、震える脚でエルザは別の出口を探す。
少年が動き出すまで、残り三十秒ほど。
それまでに出口を探せなければ、すぐ追われてセクハラ・陵辱することで絶頂させようとしてくるだろう。

（この先は浴室か。こんなところに……っ？！　しまっ……）
『イクたび厭らしく腰振り』
「ほぉぉっ♥♥　んんんぉぉぉぉぉぉぉ♥♥」
（またっ♥♥　身体が勝手にぃぃぃぃぃ♥♥）

浴室には逃げ出せるような場所はなかった。
すぐ踵を返すが、そんなエルザの行動も見透かしていたのか、否応なく目に入る位置に術式の張り紙が張られていた。

二日目、浴室での陵辱の際に少年から言われた言葉。それを文章化したものを見ただけで記憶が再生し、腰をガクガクと振ってしまう。
なんとか当時のように絶頂してしまわないよう堪え、急ぎ反対側に向かう。

「はぁ……っ♥♥　はっ♥♥　くそっ……♥♥」

ただ逃げ出すだけ。喰らったトラップも二つだけ。
にも関わらず追い詰められており、このままでは自滅に近い形で絶頂し、ゲームに敗北しかねない。
焦ったエルザは這うようにして屋敷を移動。今度は少年の部屋の前まで来ていた。

（そろそろ……あいつが動き出す……♥♥　早く抜け出さなければ……っ！♥♥）

自分が外に出られるような窓やドアはないか。見渡していると、唐突に死角から視線を感じる。

『自分を覗き見している視線に気付く』

……見渡す際に無意識に見ていた文章。
その効果が気付かぬ間に発動し、エルザは『少年に見られている』という感覚を得て視姦欲求を爆発させる。

「みっ♥♥　見られっ♥♥　あぁぁっ♥♥　んぉっ♥♥　見るなっ♥♥　見るな見るなぁっ♥♥」
（これも♥♥　あの時の――――♥♥）

少年の部屋の中で陵辱された際、客人に見られた際の視姦快楽。
それを思い出さされたエルザは、ただの視線……しかも存在しないはずの擬似視線に、独りで煩悶させられる。

（落ち着け……♥♥　誰も♥♥　誰も……見ていない……っ♥♥）

今にも達しそうになり、エルザらしくない内股で前屈みになって歩を進める。

（もう……正面玄関しか……♥♥）

じき、少年に追い付かれる。それまでにこの家から脱するには、正面玄関から出るしかない。
いかにも罠が仕掛けてありそうな場所だが、他の出口に向かっていては間に合わない。
一切触れられぬまま息を荒げ、進み……玄関近くにある棚にもたれかかる。
息を整え、一気に玄関へ……そう思った時、棚の上に置いてある小物が激しく震動しだした。
いつだったか使われた淫具、バイブとローター……その震動音を聞いただけで、エルザは直接陰核に押し当てられたように錯覚させられる。

ヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴッ♥♥
「やめっ♥♥　あ♥♥　こっ♥♥　これはっ♥♥　あ♥♥　あ♥♥　～～～～～～～～っっ♥♥」

快感やその他刺激に過敏になったエルザを責めるのに、もはや術式の張り紙すら必要ではなかった。
バイブとローターの震動音が子宮の中まで響き、いよいよ絶頂が迫ってくる。

「こっ♥♥　このぉぉっ♥♥」

淫具を叩き割り、震動音を消す。
だがその動きでも今のエルザは絶頂しかねず、振り下ろした拳を握りしめて全身を振るわせる。

「ふ――――――――♥♥　ふぅ――――……♥♥」
（もうすぐ……♥♥　もうすぐなんだ……♥♥）

慎重に、歩くだけで達してしまわぬよう気遣いながら一歩ずつ。
よたよたと覚束ない足取りで……いよいよ玄関まで数メートルの所まで来た。

（……勝った……！！）

幸い、少年はまだ近くまで来ていない。いや、近いには近いが、声や足音が聞こえるだけ。

【エルザさーん？　こっちじゃないかー……】

少年がエルザの元に辿り着くには、遠回りしなければならない位置にいるのだ。
いくらエルザが身体能力を下げられていようと、今なら追い付かれる前に玄関を開け、脱出できる。

勝利を確信し、玄関のドアノブに手を伸ばし……
そこで……少年の癖である、手を叩く音が聞こえた。

―― パンッ！

【『時間停止』】

――……
――――……

ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぅぅぅっ♥♥
「……っ？！♥♥　何だ♥♥　おまっ♥♥　いつのま……あ♥♥♥　あ♥♥♥　そんな♥♥♥
ダメだっ♥♥♥　んおぉおぉおぉおぉ♥♥♥
イッグ♥♥♥　イッグぅぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁ♥♥♥」

少年が手を叩き何やら発した直後。
何故か少年はエルザのすぐ後ろにおり……そして股間はバニースーツをズラされることで露出しており、少年

の手によって弄ばれていた。
　以前も行われた、一瞬の間での超高速陵辱。それが今もされた……されていたと知った時にはもう遅い。
　いつの間にか与えられた愛撫刺激が一気に襲いかかり、エルザは屋敷から脱出目前にして、遂に絶頂に達してしまった。

「ふっ♥♥♥　あ♥♥♥　こんな……♥♥♥　こんなことが……っっ♥♥♥」

　またしても。
　勝利を確信した時を狙い澄ましたように、惨めに敗北させられる。
　今まで何度も味わわされてきたが、今度こそは……という思いだったために、敗北後の落差、精神的ショックが大きかった。
　そんなエルザをまだ弄ぼうと、少年が仮初の希望を与えてくる。

【あーーあ、イッちゃった♪　ま、エルザさんみたいなドスケベ淫乱肉便器がイカないわけないもんね♪
　……特別に、イッても許してあげるよ？　ほら、ウチから出てみてよ。一分だけ時間あげるからさ】

　今のエルザでは、すぐ目の前にある玄関から出ることすら不可能とタカをくくっているのだろう。
　少年はここで敢えてエルザを再び自由にさせた。

【　『性的感度 極大化』　】
「っっ♥♥♥」

　無駄だとしても進む……そんなエルザの身体を、また少年が呟いた途端に性感が蝕む。
　股からは半透明の液体が垂れ流れる。
　これは絶頂しているからではない。快感が強過ぎるあまり、達していなくとも相当量の愛液が漏れる……否、噴き出すのだ。

（私は……♥♥　催眠……♥♥　かかって……ない……♥♥
　術式などに……♥♥　負けない……♥♥）

　術式の効果のせいで感度は極めて高い。一歩進むだけで達しそうになりながら、
　ゆっくり、一歩……いや、半歩ずつ進み……

【はい一分～♪】
　ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぅぅぅぅっ♥♥
「んふぉぉぉぉっ♥♥♥　おおおっ♥♥♥
　おおぉぉ～～～～～～～～っっ♥♥♥」

　あまりに遅く、手を伸ばせば届きそうなドアノブに一分かけてようやく届く。
　しかし震えて脱力し切っているためにドアを開くことができず……

　そこで六〇秒が経過、即座に追い付いた少年に再び手で陰唇と牝襞を嬲られる。
　感度が極端に高まっているため、その快感は先ほどのものより遥かに強い。
　恐る恐る歩を進めていたこともあり、エルザは踵を上げて仰け反り、頭からピンッとつま先まで反ってケダモノの咆哮を上げさせられる。

（も……♥♥♥　もう少し♥♥♥　ドアノブを下げて♥♥♥　押す……♥♥♥　だけだというのに……っ♥♥♥）
【出るのもダメ、イクのもダメかぁ……じゃぁ次は『声我慢』だね】
「っ♥♥」

　少年が今日初めて巨根を晒す。
　それは今日中にエルザを堕とす、という意志が見て取れるかのように精力に満ち満ちており、エルザは見ただけで息がつまり腰が浮く。

【ほら、跨って腰使って。エルザさんが喘ぎ声を出さずにボクをイカせられたら、今までのをチャラにしてエルザさんの勝ちでいいから】
「……っ♥♥」

　ごくりと生唾を飲み、否応なく『声我慢ゲーム』に挑む。
　少年が手を叩いて何やら呟くと共に、ゲームが開始される。

『イッた時以外は声を我慢できる』

「……いくぞ……！」
　ずぶ……っ♥
「……っ♥♥」

　少年に跨り……酷い蟹股となって、陰唇を亀頭に宛がい……腰を落とす。
　今まで散々に調教され、今も術式でほぐされたからか、大きな肉塊がすんなりと入る。
　今までは嬌声必至の挿入刺激。だが解放がかかっているためか、エルザは不思議なほど喘ぎを堪えることができた。

【ほら早く動いて、このままじゃイケないよ】
「……♥♥」
　ぐちゅ……ぱんっ♥　ぱんっ♥
「っ♥♥」
（やはり……♥♥　凄まじい快感だ♥♥　だが……っ♥♥）
　ぱんっぱんっ♥　ぱんぱんぱんぱんぱんぱん♥♥
「……っ♥♥」
（今まで一瞬堪えるので精一杯だった声が……容易に抑えられている♥♥　この調子ならば……♥♥）

　また少年が細工している可能性は大いに有り得たが、一瞬で声を出してしまうよりはマシだ。
　とはいえ快感が小さくなっているわけではない。いつ絶頂し、その拍子に声が出るは分からず、腰使いも慎重

になる。

ぱんっ……♥　ぐちゅんっ……♥
（声を……♥♥　出さなければ♥♥　いいんだ……♥♥　どれだけイッてしまおうと……♥♥　声さえ……♥♥）

しかし、そこでエルザの太股が痙攣。蟹股の股間が震え上がるも、快楽で感覚が麻痺したエルザはそれに対処できず……
気付いた時には股間が重力に負け、巨根の根本にまで吸い付いていた。

ごづんっ♥♥
「おほっ♥♥♥イグぅぅ――――――――――っっ♥♥♥」

自らの体重をかけた深い腰使い。その威力がそのまま自分自身……子宮に突き刺さり、
エルザは先ほどまで完全に我慢できていた喘ぎをいきなり喉の奥から搾り出してしまう。

「っ♥♥♥　……イッてなどいない……っっ♥♥♥」

腰をガクガク震わせながら、声だけは毅然と快楽を否定する。

【はいはい、すぐ否定できたからいいよ、ノーカンね】

クスクスと嘲笑い、全てを見透かした目で少年が許可。
屈辱にまみれながら、エルザは再び腰を動かす。

ぬぶ……♥　ぐっちゅぅ♥
「……っ♥♥」
（今度こそ♥♥　声など……♥♥）
ごつっ♥♥
「またイクッ♥♥♥　またっ♥♥♥」
【また？】
「……勘違いするな♥♥♥　今のもイッたわけでは」
ずごりゅぅっ♥♥
「イッグッ♥♥♥　もうイカせるなぁっ♥♥♥」

体験版はここまでです。続きは製品版で！